

長田神社のアオバヅク

大 賀 二 郎

昭和52年夏、長田神社境内において、アオバヅク (*Ninox scutulata*) が観察された。

長田神社は神戸市長田区長田町3丁目に位置し、西側は苅藻川に面し、東側は一街区をへだててバス道があり、大日丸山、名倉方面と市の中心部を結ぶ交通が頻繁である。しかし境内はクスノキの巨木が天を圧するように繁っていて、樹齢200～600年のものが10数本境内を取り囲んでいる。樹幹にはシノブ、ノキシノブ類が着生していて、洞のある樹もある。現在の社殿は昭和3年に再建され、更に昭和36年彩色が再現されて、樹木の緑と朱の調和がきわめて鮮やかである。外部の喧騒に比し、ここは神域としての静寂があり、長田の森として古来有名である。

東門の鳥居をくぐった左手に絵馬殿があって、その前にクスノキの巨木がある。アオバヅクはこの枝に見られることが多い。ときには正門前の保護樹木のエノキや社務所のきわのクスノキにいることもある。はっきりと確認できたのは2羽である。いずれも付近に水銀灯があって、光のスポットになっているところである。灯に集ってきた昆虫を飛びながら捕えている。カナブン、カミキリムシ、ガなどである。行動はきわめて活発で、主に灯の明るいところを往復、たびたび長い尾羽を使ってUターンをするが、飛しょうは静かである。行動半径もほぼきまっている。細い枝に止まる場合が多く、高さは7～10メートル前後、よく動く頭で前後左右の注意を怠らない。あまり高い所や樹枝が密で暗いところには行かないようである。クスノキは虫がつかないので、奥に入っても餌がないのであろう。

アオバヅクは全長25cm程度、中型のフクロウであるが、体形は比較的細長く、顔盤も他種ほどには発達していない。静止角度もやや前傾している。背面は黒かっ色、腹面は白色の地に太いかっ色の縦斑がある。

境内には夕涼みに来ている人もあるが、アオバヅクに気づいている人は殆んどいないようだ。大きさも神社にすみついているハトとあまり変わらない。

活動時刻は午後9～11時頃が多く、活動中はギィギィ

という継続音を発するが、他にいろいろな声を出すようだ。深夜になるとやや高い枝で休息していることが多い。

アオバヅクは神戸市街地でも50～51年夏、兵庫区夢野橋の柳での観察例がある。ここも住宅街の真中で交通の頻繁な所であるが、湊川にそって樹枝がトンネル状になっていて、部分的に暗所をつくっている。長田神社の場合も明るいところと暗いところの境目に位置しており、環境条件では一致している。つまり夜間光を求めて昆虫類が集まる場所にあり、かつ背後に暗所があって、捕食にきわめて有利な位置であるということが出来る。このような条件から北区の山間部にある市の清掃工場の周辺でもよく見られると聞いている。背山には多数生息している模様であるが、市街地での観察例は非常に珍しいと思われる。

この鳥は夏鳥で、ほどなく当地から去って行くのではないと思われるが、その分布は夏期は東部シベリアから本州にかけて、冬期はボルネオ、セイロンなど東南アジアに分布するといわれている。

長田神社のアオバヅクは梅雨明けの7月中旬に初めて発見したが、あるいはそれ以前から来ていたのかも知れない。この間、同境内で夏越祭や薪能の行事があり、夜店がでて、たくさんの人出があったが、鳥はこの影響をあまり受けなかったようだ。この原稿を書いている8月末には虫の数も少なくなったが、鳥はまだ実在している。同社はその樹木の様相からして、かねてから何かいるという実感があった。フクロウ (*Strix uralensis*) が地上に落ちていたこともある。アオバヅクはこの夏がはじめてなのかどうか、よくわからないが、この都会のなかの緑の舞台に自然の出演者が毎夏戻ってくることを期待したい。

ちなみにアオバヅクの種類 (*Ninox*—) は他に15種程知られており、主として東南アジアが産地で、フィリピン、セレベス、モルッカ、アンダマン、ニューギニア、ニュージーランド、オーストラリア、マダガスカルなどに固有種が知られている。